TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　674語

The Story of the First Ants

はじめてのアリのおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Leannie Rach

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　ちょっとしたいたずらのつもりで「すばらしい鼻をもっている」と言ってしまった男。うわさは国じゅうに広まり、とうとう王さまによびだされて……。

"This jar is full of smoked flesh," said one voice.

"This has fish, this is full of honey, and that one is almost running over with oil," said another voice. "We shall have all that we need to eat for many days to come."

These are the words that a villager coming home from his work heard his mother and his sister say.

"They have often played tricks on me," he said to himself, "and now I will play one on them." So he went into the house and said, "Mother, I have found that I have a wonderful sense of smell, and by its help I can find whatever is hidden away."

"That is a marvelous story," cried the sister.

"If you can tell me what is in these jars," said his mother, "I shall think you are really a magician. What is it now?"

"This is flesh, this fish, this honey, and this jar is full of oil," said the man.

"I never heard of such a marvel in all my life," cried the mother; and in the morning she called her friends and said, "Only think what a wonderful sense of smell my son has! He told me what was in these jars when they were closed."

It was not long before the people all through the country heard of the wonderful man, and one day word came that the king wished to see him at once.

The man was afraid, for he did not know what would happen to him, and he was still more afraid when the king said, "A pearl is lost that I had in my hand last night. They say you can find things that are lost. Find my pearl, or your head will he lost."

The poor man went out into the forest. "Oh, how I wish I had not tried to play tricks," he wailed. "Then this sharp sorrow, this dire trouble, would not have come upon me."

"Please, please do not tell the king," said two voices in the shadow of the trees.

"Who are you?" asked the man.

"Oh, you must know us well," said a man coming out into the light. "My name is Sharp, and that man behind the tree is named Dire, but please do not tell the king. We will give you the pearl; here it is. You called our names, and we saw that you knew us. Oh, I wish I had not been a thief!"

The man gave the pearl to the king, and went home wishing that no one would ever talk to him again of his sense of smell.

In three days word came from the queen that he must come to her at once. She thought his power was only a trick, and to catch him she had put a cat into a bag and the bag into a box.

When the man came, she asked sharply, "What is in this box? Tell me the truth, or off will go your head."



A WONDERFUL SENSE OF SMELL

"What shall I do?" thought the man, "Dire death is upon me." He did not remember that he was before the queen, and he repeated half aloud an old saying, "The bagged cat soon dies."

"What is that?" cried the queen.

"The bagged cat soon dies," repeated the man in great terror.

"You are a marvelous man," said the queen. "There is really a bag in the box and a cat in the bag, but no one besides myself knew it."

"He is not a man; he is a god," cried the people, "and he must be in the sky and live among the gods;" so they threw him up to the sky. His hand was full of earth, and when the earth fell back, it was no longer earth, but a handful of ants. Ants have a wonderful sense of smell, and it is because they fell from the hand of this man who was thrown up into the sky to live among the gods.

「このつぼには、いぶした肉がいっぱいね」とひとりの声が言いました。

「これには魚、これにはみつがいっぱい、それからあれには油があふれそうなくらい入っているわ」とべつの声が言いました。「これでこれから何日も、食べるものにはこまらないわね。」

これは、仕事から帰ってきた村の男が、お母さんと妹が話しているのを聞いた言葉でした。

「ふたりにはよくいたずらをされたからな」と男はひとりごとを言いました。「こんどはこっちがいたずらしてやろう。」そこで男は家に入って言いました。「お母さん、ぼくはすばらしい鼻をもっていることがわかったんだ。においで、かくしてあるものは何でも見つけられるんだよ。」

「それはふしぎなおはなしね」と妹はさけびました。

「このつぼに何が入っているか言いあてられたら」とお母さんは言いました。「おまえはほんとうにまほう使いだと思うことにするよ。さあ、何が入っている？」

「これは肉、これは魚、これはみつ、そしてこのつぼには油がいっぱいだ」と男は言いました。

「生まれてこのかた、こんなふしぎなことは聞いたことがないよ」とお母さんはさけびました。そして朝になると友だちをよんで言いました。「まあ聞いておくれ、うちのむすこはなんてすばらしい鼻をもっているんだろう！ふたがしまっているのに、つぼの中身を言いあてたんだよ。」

まもなく、国じゅうの人々がこのすばらしい男のことを聞きつけ、ある日、王さまがすぐに会いたいと言っているという知らせがとどきました。

男はこわくなりました。自分がどうなるかわからなかったからです。そして王さまがこう言ったので、もっとこわくなりました。「ゆうべ手にもっていた真珠がなくなったのだ。おまえはなくしたものを見つけられるそうだな。わたしの真珠を見つけるのだ。さもなければ、おまえの命はないぞ。」

かわいそうな男は森へ出ていきました。「ああ、いたずらなんかしなければよかった」と男はなげきました。「そうすれば、こんな『シャープ（するどい）』かなしみも、こんな『ダイア（おそろしい）』わざわいも、ふりかからなかったのに。」

「どうか、どうか王さまには言わないでください」と、木のかげから2つの声が言いました。

「だれだ？」と男はききました。

「おや、よくごぞんじのはずですよ」と、ひとりの男が明るいところへ出てきて言いました。「わたしの名前はシャープ、木のうしろにいるのはダイアといいます。でも、どうか王さまには言わないでください。真珠はおかえしします。はい、これです。あなたがわたしたちの名前をよんだので、わたしたちのことがばれているとわかったのです。ああ、どろぼうなんかしなければよかった！」

男は真珠を王さまにわたし、もうだれにも鼻の話なんかしないでほしいと思いながら家へ帰りました。

3日たつと、女王さまから、すぐに来るようにという知らせがとどきました。女王さまは男の力はただのごまかしだと思っていて、それを見やぶろうと、ネコをふくろに入れ、そのふくろを箱に入れておいたのです。

男がやってくると、女王さまはきびしくききました。「この箱には何が入っている？ほんとうのことを言いなさい。さもなければ、命はないぞ。」

すばらしい鼻

「どうしよう？」と男は思いました。「おそろしい死がせまっている。」男は女王さまの前にいることもわすれて、むかしからのことわざを、小声でつぶやきました。「ふくろの中のネコは、もうすぐ死ぬ。」

「何と言った？」と女王さまはさけびました。

「ふくろの中のネコは、もうすぐ死ぬ」と男はすっかりこわくなってくり返しました。

「おまえはほんとうにふしぎな人だ」と女王さまは言いました。「たしかに箱の中にはふくろがあって、ふくろの中にはネコがいる。でも、わたしのほかはだれも知らなかったのだよ。」

「この人は人間じゃない。神さまだ」と人々はさけびました。「空の上で神さまたちといっしょにくらすべきだ。」そして人々は男を空へほうりあげました。男の手には土がいっぱいにぎられていて、その土が落ちてくると、もう土ではなく、ひとにぎりのアリになっていました。アリがすばらしい鼻をもっているのは、空へほうりあげられて神さまたちとくらすことになったこの男の手から落ちてきたからなのです。

たんご と クイズ はじめてのアリのおはなし

jar つぼ	**fish** 魚	**honey** みつ
king 王さま	**pearl** 真珠	**cat** ネコ
box 箱	**ants** アリ	

Q1 男がつぼの中身を言いあてられたのはどうして？

① ほんとうに鼻がよかったから　② お母さんと妹の話を聞いていたから　③ つぼのふたをあけたから

Q2 王さまのしんじゅをぬすんでいたのはだれ？

① シャープとダイア　② 女王さま　③ 男の妹

Q3 男の手から落ちた土は、何になった？

① 真珠　② ネコ　③ アリ

こたえ

Q1 ② 男は、お母さんと妹がつぼの中身を話しているのを、家に入る前に聞いていたのです。

Q2 ① シャープとダイアは、名前をよばれて正体がばれたと思い、ぬすんだしんじゅを男にわたしました。

Q3 ③ 空へほうりあげられた男の手から落ちた土は、ひとにぎりのアリになりました。だからアリは鼻がよいのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Leannie Rach（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。